

BFH (Baby Friendly Hospital) 活動を 地域でとりくむ大学病院

～大学病院だからこそできる妊産婦への寄り添いとは～

2024年6月12日

第186回日本産婦人科医会記者懇談会

岩田 亜貴子

横浜市立市民病院 産婦人科担当部長

前 横浜市立大学附属病院産婦人科 産科主任

横浜市立大学附属病院

- 横浜市立大学附属市民総合医療センターとともに横浜市立大学の附属病院
- 2病院ともにBFH (Baby Friendly Hospital)の認定を受けた施設
- 地域周産期センター
- 分娩数約500件/年



大学附属病院としての役割

- 多種多様な合併症や背景をもつ妊産婦の対応
- 地域での対応困難な症例の受け入れ
- 高度かつ先進的な医療の提供

- 医師、助産師の教育
- 医学生、看護学生、助産師学生の教育

- 臨床研究、基礎研究

医療

教育

研究

大学附属病院の強み

- 多くの科、多くの専門家が存在し多彩な合併症に対応が可能。
- NICUがあり小児科医が常駐し早産や新生児治療に対応できる。
- 手術室、集中治療部門があり、急変対応が可能である。
- 産婦人科医師も多くマンパワーがある。
- 365日24時間体制で上記対応が可能。



高度かつ安全な医療が提供できる
しかし妊産婦が分娩に求めるものはそれだけではない

大学附属病院の一般的な負のイメージ

- スタッフが忙しそうのでゆっくり診てもらえない
- スタッフが怖い
- 画一的な対応をされる
- すぐに会陰切開される、促進剤を使われる
- 産後丁寧に対応してもらえない
- 産婦の要望をきいてくれない
- 母児分離される
- 学生や研修医に処置される

寄り添ってもらえない
というイメージ

これらのイメージを取り除き、大学附属病院の強みも生かしながら、妊産婦に寄り添う周産期医療を提供したい。

⇒BFH活動に取り組むことで大学附属病院の新たな価値を創造

Baby Friendly Hospital とは

赤ちゃんにやさしい病院

日本母乳の会HPより

Baby Friendly Hospital (BFH) について

1989年3月 WHO・ユニセフは、「母乳育児の保護、促進、そして支援」するために、産科施設は特別な役割を持っている。という共同声明を発表しました。

世界のすべての国のすべての産科施設に対して「[母乳育児成功のための10カ条](#)」を守ることを呼びかけました。母乳育児成功のための基準は、WHOとユニセフによって、世界のすべての病院に広く紹介されています。

WHO・ユニセフは、「[母乳育児を成功させるための10カ条](#)」を長期にわたって遵守し、実践する産科施設を「赤ちゃんにやさしい病院」として認定することになりました。現在、日本国内では66施設が認定されています。

(2021年10月現在)

母乳育児を成功させるための10カ条

① 病院の方針

病院は母親の母乳育児を支援するために

乳児用調整乳、
哺乳瓶、人口
乳首の販売促
進をしない

母乳育児支援を
標準の実践とする

母乳育児支援の
経過を記録する

② スタッフの臨床能力

病院は母親の母乳育児を支援するために

スタッフに対し、
母乳育児を支援
する為のトレー
ニングを行う

保健医療従事者
の知識とスキル
のアセスメントを
行う

③ 産前のケア

病院は母親の母乳育児を支援するために

赤ちゃんと
母親にとって
の母乳育児の
重要性を話し
合う

赤ちゃんに
どのように
授乳するの
かを 女性
にあらかじめ
伝える

母乳育児を成功させるための10カ条

4 出産直後のケア

病院は母親の母乳育児を支援するために

出産後早期に母親と赤ちゃんの肌と肌のふれあいを促す

母親が産後すぐ赤ちゃんを胸に抱けるように援助する



5 母乳育児ができるように母親を支援すること

病院は母親の母乳育児を支援するために

授乳姿勢、吸着、吸嚙(抱き方、吸いつき方、吸い方)を確認する

実際的な母乳育児支援を行う

よくある母乳育児の問題に母親が対処できるように援助する



6 補足

病院は母親の母乳育児を支援するために

医学的理由がある場合を除き、母乳だけを与える

補足が必要な場合は、まずはドナー母乳を与える

人工栄養を望む母親に対しては安全にできるように援助する



母乳育児を成功させるための10カ条

7 母子同室

病院は母親の母乳育児を支援するために

母親と赤ちゃんが
昼夜一緒に
過ごせるようにする

病気の赤ちゃんの母親も
赤ちゃんの近くに
いられるようにする



8 赤ちゃんのサインに応える授乳

病院は母親の母乳育児を支援するために

母親が、赤ちゃんの
空腹のサインが
わかるように
援助する

授乳の回数や時間を
制限しない



9 哺乳びん、人工乳首、おしゃぶり

病院は母親の母乳育児を支援するために

哺乳びん、
人工乳首、
おしゃぶりの
使用や
そのリスクに
ついて、
母親と話し合う



10 退院

病院は母親の母乳育児を支援するために

母乳育児支援の
ための
地域のリソースを
母親に紹介する

地域・共同体と
協働し、
母乳育児支援の
ためのサービスを
改善する





- BFHの10か条を実践するためには、産前から産後まで切れ目のない細やかな妊産婦支援が必要である。
- 決して母乳育児を強制するものではなく、母児の絆を尊重し寄り添うことに重きをおく。
- 多様化したニーズへ対応する姿勢にもつながる。



実際の取り組み

- **地域にむけて**

 - 市民公開講座の開催

 - 病院ホームページへの理念掲示

- **院内スタッフにむけて**

 - 病院掲示物による教育

 - e-Learning

 - 母乳育児推進委員会（多職種）

- **妊産婦にむけて**

 - 個々の妊産婦を理解する

 - 教育、支援、ケア

地域に向けて：市民公開講座

- 下記のような市民公開講座を毎年施行
- お産に関心をもってもらい、親子の自然な触れ合いのを大事に考えている施設であることを伝える目的
- 小児科医師、助産師、産婦人科医師が協力して開催
(現在コロナ禍で中止、オンライン開催や動画公開等を模索中ではありません)

「お産と母乳育児」をのりきる体づくり ～赤ちゃんにやさしい病院 BFH(Baby Friendly Hospital)からのメッセージ～

本当に無事に生まれるのかな...、おっぱいで育てたいけど母乳がちゃんと出るのかな...、という漠然とした不安はありませんか？
本講座では、そんな不安を少しでも和らげ、皆さんが自分らしいお産をイメージし、母乳育児を楽しく自信を持って続けていけるように、母乳育児のエッセンスを届けます。一緒に語り合しましょう。



高年妊娠と母乳育児

横浜市立大学2病院は、ユニセフと世界保健機関から「赤ちゃんに優しい病院」として認定されています。
最近増えている高年初産の方の妊娠、出産、母乳育児について分かりやすく解説いたします。

院内スタッフに向けて



「おっぴいはっぴい♪」No.20



<第27回母乳育児シンポジウムin長崎>

8月4・5日、長崎県の長崎ブリックホールにて第27回母乳育児シンポジウム～みんなを支える、みんなで支える～が開催され、当院からも6-2病棟助産師・NICU看護師・新生児科医が参加してきました。



シンポジウムでは、産前・産科入院中、産後、そして地域を巻き込んだ切れ目のない支援を実践するにはどうすればいいのか、リスクを抱えた母子に対してどのような支援が考えられるのかといった内容が盛り込まれていました。当院は大学病院であり、合併症を抱えながら妊娠・出産・育児を行っている母親が少なくありません。母乳育児を行うことができないお母さんや赤ちゃんに対する支援がおろそかになってはいけないことを今回のシンポジウムを通して強く感じました。

お母さんたちにとって育児は長い間続いていきますが、誰しも理想どおりに育児ができるとは限りません。妊娠～産科入院中は精神的にも身体的にも変化が大きい時期です。私たち助産師は育児の始まりの貴重な瞬間に立会い、支援することができる立場にあります。お母さんの気持ちに寄り添いながら、ひとりひとりに適した授乳方法や育児の方法について、お母さんと話し合いながら決定し支援させていただきたいと思えます。

<2018年BFH再認定となりました>

当院は2008年にBFH（赤ちゃんにやさしい病院）にWHO・UNICEFより認定されました。昨年度は認定9年目の評価の年で



- 母乳育児シンポジウムやワークショップへ参加を支援
- 新たな情報や知識を得て院内スタッフへ共有する
- 病院全体としての意識を高め、共通認識となるよう、院内掲示やe-Learning等を定期的実施する。
- 母乳推進委員会（多職種）を定期開催

院内掲示の例

妊産婦へ向けて＜出産前＞

- **妊婦の背景・合併症の把握**

- 大学附属病院であり合併症を持つ妊婦の比率が多い
- 家族背景、経済面、育児サポーターの有無も重要

- **妊婦への教育**

- SNSなどから勝手な思い込みや勘違いを抱く妊婦も多い

- **妊婦の希望をくみ取る**

- 母乳の希望だけではない
- 出産に対する希望、長期的な育児に対する想い

- **妊婦の希望と医学的な背景を融合させた個々のプランを立てる**

- 希望にどこまで添えるか、事前に準備しておくことはあるか

- **特に必要な妊婦に関しては多職種で事前カンファランス開催**

- 地域や家族を含めた事前協議をおこなうこともある

妊産婦へ向けて＜出産～出産後＞

- **出産育児プランの実践**

- 分娩にいたる過程におけるケア
- 母乳育児確立にむけての支援
- 人工乳希望または医学的に必要である場合の支援
- 産婦のみでなく家族を含めた支援が必要

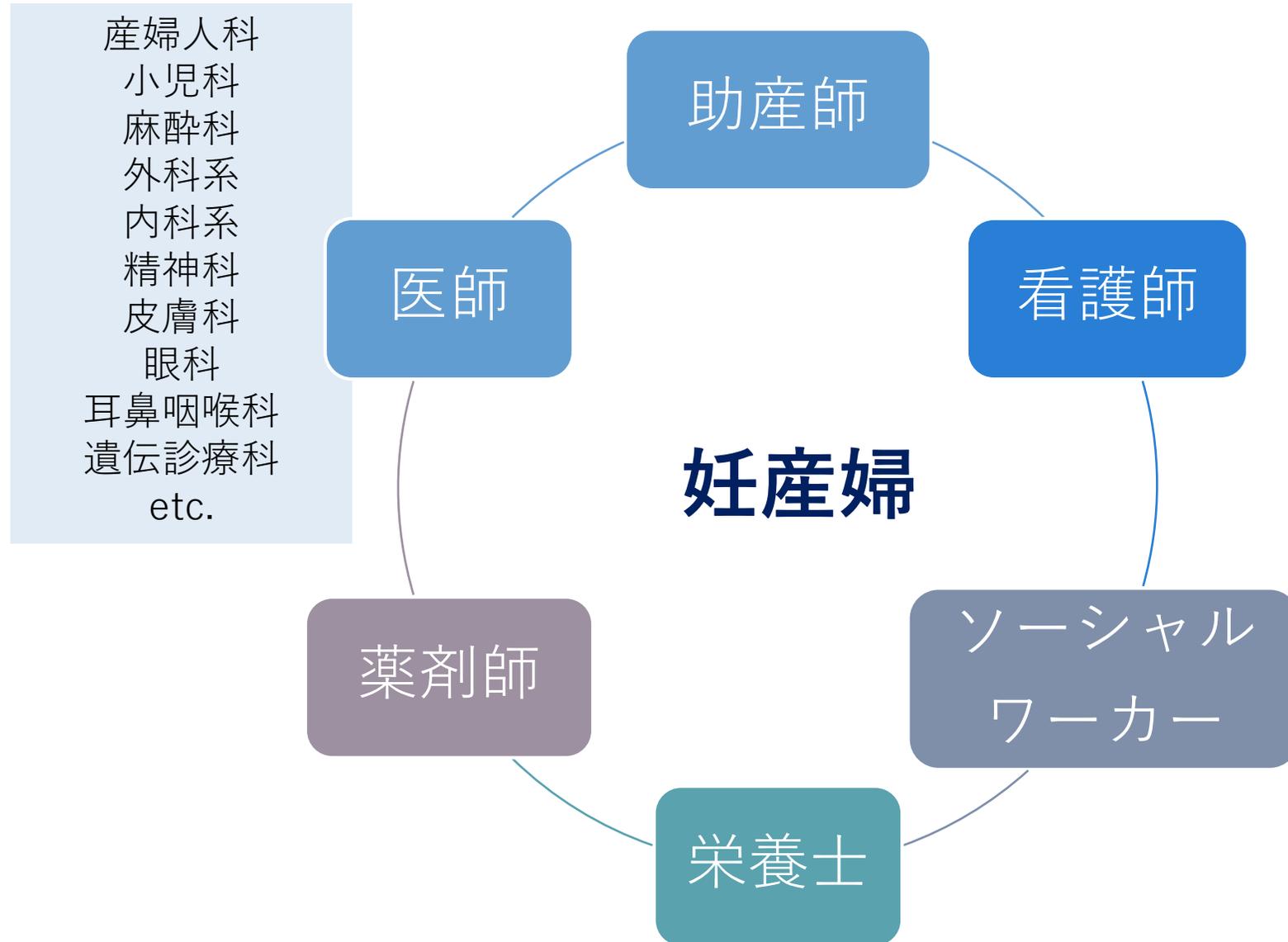
- **出産育児プランの見直し、修正**

- 出産や育児は思い通りにならないことが多々ある
- その都度プランの見直し修正が必須である

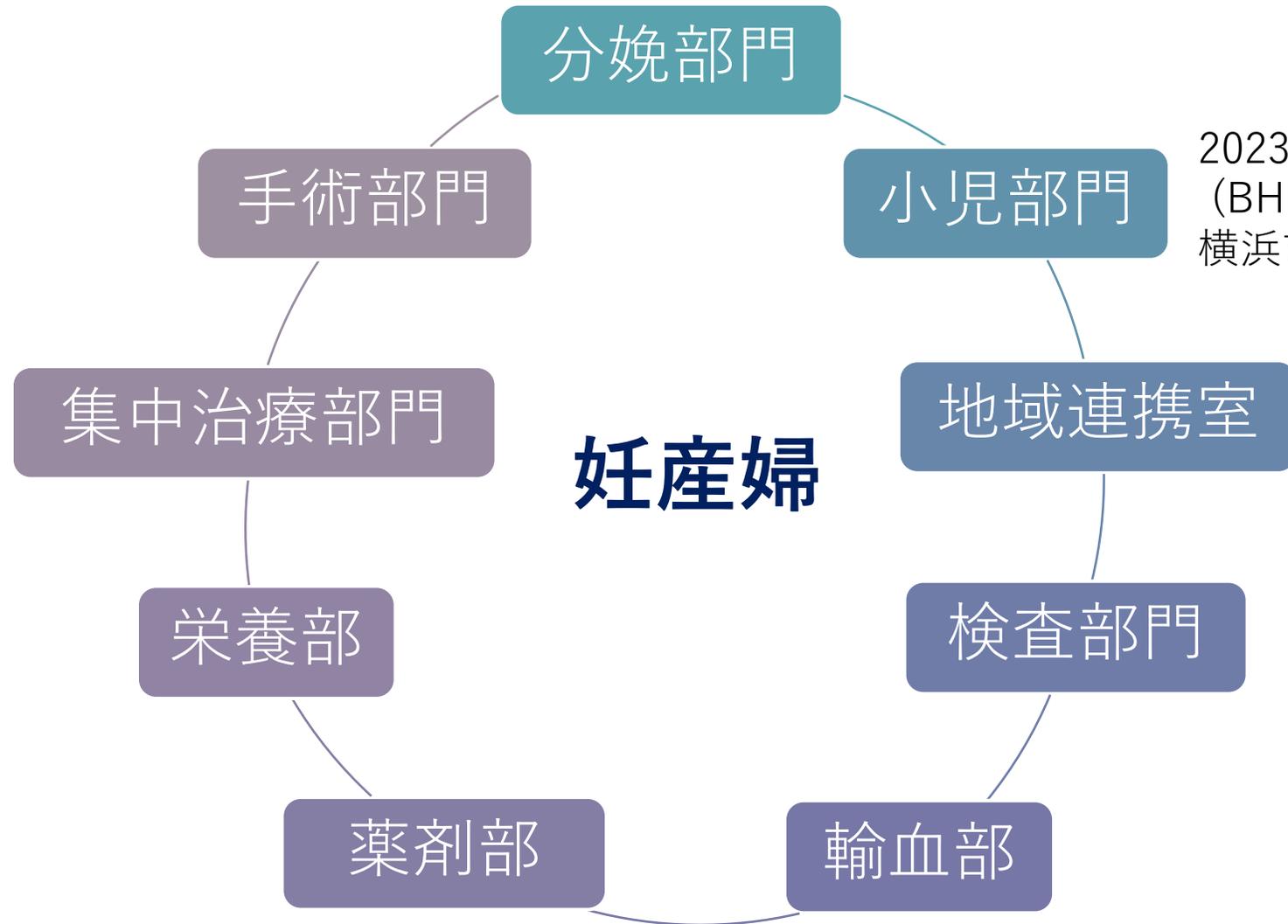
- **長期的な支援を地域につなげる**

- 育児は長期戦、自院の外来のみでは不十分
- 地域と関わり支援の目が適切に届くようアドバイスや手配

妊産婦を支援する専門職



妊産婦を支援する部門



2023年より赤ちゃんにやさしいNICU (BHNICU) の認定も開始され、横浜市立大学附属病院も現在申請中

妊産婦へ「寄り添う」とは（私見ですが）

- 価値観を押し付けるのではなく
- 言いなりになるでもなく
- 個々の背景を理解して
- 正しい知識や理解を与え
- 適切で安全な医療を施し
- 妊産婦自身の選択や自律を促し
- 喜び悲しみ苦しみを共感の態度で受け止め
- 迷う時には道しるべとなり
- 妊産婦の自立を見届ける

これには膨大な時間と熱意、マンパワーが必要である

大学附属病院で出産するということ

- 妊産婦自身の望む産院を選べれば満足度も高いだろう。
- 医療資源の手厚さや安全性を求めて大学病院を選択する人もいる。
- しかし合併症等のため、やむを得ず大学病院で出産する妊産婦もいる。
- さらに妊娠経過や分娩方法，育児の全てが望み通りではない可能性すらある。

「小規模産院を希望していたが合併症があり断られた」
「思いがけず早産となり母児分離となった」
「母乳育児をしたいが合併症があり制限がある」
「常用薬があり母乳育児できるのかわからない」
「自然経膣分娩を希望したが合併症のため帝王切開」
「産後すぐに体を動かさず育児困難」
「育児支援者がいない」
「経済的に困窮している」 等々

患者のニーズと現実の乖離が大きいことが多く、
穴埋めは容易ではない。

大学附属病院だからこそできる 妊産婦への寄り添いとは

- 個々の妊産婦の抱える医療的、心理的、社会的問題を正しくアセスメントする。
- 個々の妊産婦の多様なニーズや思いをききとる。
- 妊産婦ごとに提供できる医療やケア，支援を協議する。
- 妊産婦を中心として多職種で支援する。
- 必要に応じて専門家との連携をおこなう。
- 退院後も地域と連携して妊産婦が自立するまで支援する。

Key Word

妊産婦中心 個別化
多職種 専門性

おわりに

- ハイリスク妊産婦を受け入れている大学病院だからこそできる妊産婦への寄り添い方がある。
- BHFの理念を生かした関わり方を実践することが、妊産婦へ切れ目のない支援をおこなうことにつながる。
- 今後、多様化する妊婦の背景やニーズに向き合い、適切な支援を継続していく。